

道後上人坂

(小説「残りの坂」を改題補筆)

著者 青山 淳平

挿絵 柳田 補

発行所 社会思想社



四月が過ぎ、五月になった。

小説は一向に進まず、代わってみね子の懐妊と栗原槇子のことが万作の関心の中心になりはじめていた。

倉田はアパートへは、ぱったり現われなくなった。

万作は気にかかり、ここ数日かど庵を覗いているが、倉田はいつも不在だった。倉田はみね子に自分の子を産ませるつもりでいる。何も知らない静江に会うのはさすがに気がひけて、万作はいつも店頭でひきかえした。

槇子の手紙の方は、引き出しにしまわれたままになっている。

南予の八幡浜に、大久保山と呼ばれる標高五百メートルほどの山がある。万作は、大久保の久保は窪野の窪ではなかったかと推理している。弓島に手がかかりが発見できなかったいま、その山へ調査に出かけたいが、もう想像するだけにしておこうという妥協ともあきらめともつかない思いが先立ち、槇子への返事がずるずる遅くなっていった。それに、何よりいまは北谷説が関係者に受け入れられているという客観的な事実や情勢が、万作の情熱を削いでいたのである。返事を書くにしても、まず川瀬に会ってからにしようとするに言い聞かせているうちに一月が過ぎていた。

そして連休が明け、その川瀬道則に会う日がきた。

シンポジウムの事前の打ちあわせのため、万作は川瀬を大学の研究室に訪ねた。

川瀬が企画したシンポジウムの要項は次のようなものである。

パネラーは、「こころの旅人・一遍」の演題で基調講演をする歴史学会の大物のKと川瀬、江波の三人。司会は地元新聞社の論説委員、進行役は地元民放局の人気女性キャスターに決まった。

講演の後、「予州の窪寺はどこだったか」の課題と関心に応えて、川瀬と江波の二人が各自四十分間の報告を行う。その後、討論や意見交換に入るが、「窪寺閑室跡」の特定に関する研究成果の発表が、この時に川瀬から、スライドと八ミリビデオを併用して行われるという。

二人の打ち合わせはすんなり一段落した。川瀬は立って茶を淹れ、中村屋の月餅を添えて万作のまえに差し出した。月餅には無農薬の茶が一番だが、これは信濃から月餅用に取り寄せた茶の葉でしてね、と川瀬はいい、万作の襟元のループタイにちらっと視線を走らせる。背後の窓から、五月の空とポプラの並木が見える。

「それで先生、北谷の方はもうごらんいただけたでしょうね」

と川瀬は万作に確かめた。

「いや、まだ……」

「そうですか、それは残念です」

川瀬の眼鏡の奥の目が、一瞬なじるように光った。

「記念碑を建立中、と聞いていますが」

万作は話をつなぐ。

「ええ、そうです。基礎工事は終わりました」

川瀬は自信に満ちた表情でいった。

それから川瀬は万作の求めに応じて、「成道地」特定の理由にした事柄を三点ほど万作に紹介した。

一つに、「聖絵」に描かれている閑室周辺の稲田や小川の位置と形状、竹藪、畔道の様子などが今日の北谷の環境状況と酷似していること。二つに、「聖絵」の閑室の画面の左端に立つ道標らしきものが、現在も近くの民家に祭られていること。最後に、一遍の開悟と修験道は密接な関わりをもつが、北谷に残る数基の五輪塔や字名と小字名、ホノギなどは、鎌倉時代にはここが修験道地であった証拠であり、閑室立地の聖域性を裏付けるということであった。

川瀬は窓外に目をやりながらつけたした。

「成道地は聖地ですから、特別に清められた場所だったと思いますよ。それに」と万作の方へ向き直り、

「まあ北谷の場合も、昭和四十年に一遍の祖父の墓である聖塚が、聖絵をもとに断定された経緯と似通っていますよ。物的な証拠はないが、状況証拠は十分だと思います」

と自信たつぷりである。

万作の思いは複雑であった。

このままシンポジウムを迎えれば、北谷が予州の窪寺の成道地として宗門や学会から認知されるのは確実である。

「シンポジウムには、だいぶ参加者がありそうですね」

「おかげさまで新聞社が力をいれていますから、きっと会場はいっぱいになるでしょう」

「いっぱいですか……」

万作は呟いた。いよいよ気が重い。

川瀬は書架から最近の論文を取り出し、たいしたことは書いていませんがと謙遜しながら万作へ差し出した。

「ところで」と、かれは改まった。

「発表順ですが、江波先生から先にお問い合わせできますか」

「はい、わかりました」

とあっさり、万作は承諾したものの、すぐ事情が飲み込めて、一瞬、卑屈な気持ちで万作の中を走った。が、すぐにかれは自分の置かれた立場を素直に受け入れることにした。川瀬は満足そうに二度三度と軽く頷き、しばらくシンポジウムに招く講師のKの近況を話題にした。